
失われた国　－夢に囚われしもの－

沢凪 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた国 一夢に囚われしものー

【Zコード】

Z0876Y

【作者名】

沢凪 炯

【あらすじ】

大陸の中心を統べるクリスト帝国。弓術師で賞金稼ぎのフィフイは、安定した高収入を求めて城の求人募集の面接を受ける事に。募集は大魔術師の助手。さくっと面接に受かったものの、その大魔術師アシュリーに会つてみれば「要らない」と言われる始末。負ければ即・クビの御前試合でなんとか残り、正式に助手（何故か兼護衛）となつたものの、一向に「要らない」と言われ放置されるのは変わらず・・・。

そんなアシュリーに勝手についていく彼女と、彼女を面白がって

応援する城の住人達。そうしてある日訪れた嵐が、クライストに危機を及ぼす可能性がある、とアシュリーと出かける事に。徐々に距離の近づいて行くアシュリーとフィフィの物語。

プロローグ

孤島の王国があつた。

大昔には誰も知らなかつた王国。

外界となんの接触もなく時を過ぎこしたその国は
何時でも花が咲き乱れており、とても美しく、平和で、穏やかな
国だつた。

治めるのは代々女王。

優雅で美しく、聰明で、誰からも好かれていた。

？？時代が移り変わり

やがて一隻の船がこの孤島を見つけると、瞬く間に外界との交流
が始まつた。

文化、物資、様々なものが行き来し

いつしか王国に、外界の血が混じるようになつていつた。

それは、王家にも言える事。

しかしその頃から、王国の花々は枯れていつた。
憂えた誰もが親身になつて世話をしても
それを拒絶するかのように、花は枯れていつた。

そして、花が枯れるにつれ、孤島を囲む海が荒れていった。

徐々に外界は孤島に近付くのを止め、遂には誰も近寄らなくなつた。

海は荒れ、花は枯れ、人も病に倒れるものが多くなつていった。

それでも、王家だけは病に倒れなかつた。

けれどもいつも悲しみが付き纏い、次第に莊厳な城から出る事は無くなつた。

失意の底で、女王は祈る。

どうかこの海が静まるよう。

どうかこの花々が咲き乱れるよう。

どうか病が無くなるよう。

どうか、どうか？？

この王国が、かつての美しい姿を取り戻すよう。

そして??

願わくば、哀れな私の娘が、愛するの方と共にいれるよう。

その晩、女王は眠りについた。

眠りは夢を誘い、彼女を虜にする。

咲き乱れる花々。楽しそうな人々。静かに波打つ海。

の方と幸せそうにする娘。

全てが望むもの。
全てが憧れるもの。

そんな夢を毎晩見るようになっていた。

そんな夢にずっといたいと思う様になっていた。
それが現実ならいいのにと願つようになっていた。

ある朝、姿を見せない母を不思議に思った王女は、そっと母の寝室を覗いた。

眠っている母の顔を見て、王女は少し微笑んだ。

その顔が、あまりに幸せそうに満ち足りていたから。

しかし、そっと頬を撫でて凍り付いた。

女王はもう、冷たくなっていた。

それなのにどうだろ？

その肌は柔らかく、まるで生きているかのよ。

鼓動も止まり、息もしていない。

それなのに、女王は眠つてゐるよつてみえる。

その肌は、冷たく。

しかし、生きてはいない。

いつの間にか、母の周りには、失われた花々が芽吹き始めていた。

時は流れ??

ここにはクライスト帝国。大陸の中心を統べる大国であり、その中心である王族、軍人のみならず国民さえもが国を考え、国を作っている。

絶対的な信頼でこの国は成り立っていた。

その帝国一のギルドで今、運命の歯車が廻り始める??。

「高収入? そんなのいくらでもあるだろうが。ほれ、こいつなんか生け捕りにしたらかなりの大金だぞ?」

そう言つてギルドの男が指名手配書をひらひらと振る。それをうつとおしそうに見やり、言葉を続けた。

「そうじやなくて、持続出来るものないか?」

ギルドの男はびっくりと眉を跳ね上げ、訊ねた相手を睨んだ。

「だつたら城にでも行け! ここは安定職の仲介所じゃねえ。」

「じゃあ城関連のないのかよ。」

「城に行きやあ分かる事だろ? が!」

「はあ、と相手は大仰に溜め息を吐ぐ。わざとらしく落胆して見せるのだ。」

「帝国一のギルドだつていうから、期待してきたのに残念だな。結局他廻るしかないのかー。無駄足だつたな。」

相手はまだ二十歳前後だらう。細身の体は鍛えてありそつだが、別段熟練した風でもない。そんな青一才に馬鹿にされるわけにはいかなかつた。

「無駄足だと！？」

「だつてないんだろ？ 城の仕事は城に行かなきや分かんないんだろ？ なら無駄足じやねーか。」

「おい…ナメた事言つてんじやねえぞ。」

そう言つと、ギルドの男は何かを思い出したようで、忙しくリストをめくると、一枚の紙を嫌味な笑顔とともに突き出してきた。

「月収200万イルだ！ 文句ねえだらうが！」

返事はせず、相手は紙をひつたくると内容を確認し始めた。

「……大魔術師の助手？ 該当者も内容も、全部わからねえじやねえかよ！」

「面接で話すつて書いてあんだけうが？ ビうすんだ。」

「……仕方ねーな。受理しろ。」

「偉そうに言うんじやねえよ！」

ギルドの男は荒々しく書類に判を押し、相手に押し付ける様にして渡した。こんな生意気なガキの相手などしていたくはない。

「さつさと失せやがれ！」

そう怒鳴つたものの、身体に触れて違和感を感じた。男の顔色が変わると、相手は舌打ちとともに紙を奪い取り、一歩離れてから不遜に笑つ。

「礼は言つといでやるよ。」

捨て台詞とともにわざと出口へ向かつ。男は何も言えないまま、扉が閉まるのを見ていた。

クライストの城では、一つの魔法陣の前で思い悩む女性がいた。名はニルヴァ・ナ。呼び名はニル。

憚氣だが芯の強そうな瞳は赤みを帯びた紫。端麗な容姿を飾る真っ直ぐで長い髪は艶めく銀色。少し突き放した物言いをするが、困つている者を放つておけない性格から、男女から好かれる大魔術師だ。

「さて……なんて説得しようかしら……」

今も放つて置けない事態をなんとかしようと、思い悩んでいる。すると廊下から声をかけられた。

「ニルヴァ？ ナ様！ いらっしゃいますでしょうか？」

兵士だろう。ニルは魔法陣を諦め、扉を開けた。

「なに？」

「はっ！ ギルドから、助手の希望者が来ております！」

「助手…？ ああ、あれね！ どこにいるの？」

「はっ！ 検問室で待機しております！」

「そう、ありがとう。」

それだけ言つてニルは歩き出す。兵士は数秒見送つていた。

「ニルヴァ？ ナ様… お綺麗だ…！」

検問室に入ると、すぐに希望者が田に入った。厚手のマントを羽織り、緊張した様子もなく椅子に座っている。その様に、思わず笑ってしまった。すると希望者がこちらを見て立ち上がった。

「私は大魔術師のニールヴァ・ナよ。」

「…」「術士のファイフイです。助手を探してるのは貴方ですか？」

「……貴方、女性？」

「はい。よく間違えますが、女です。」「ニールはまじまじとファイフイを見てしました。

薄茶の髪は肩につくかつかないかくらいで、背も女性にしては高め、男性にしては低めといったところ。顔立ちも中性的で、男だと判断されるのは、少し低めの声と、落ち着いた、少し堂々とした態度からだろう。

「…男名を下さると便利なんですが。」

その台詞に、今度は噴き出しちゃった。

「面白い人ねーさ、座つて。話をするわ。」

言われてファイフイが腰を下ろすと、ニールは少し楽しそうに話しかけた。

「ここへ来る前は何を?」

「ギルドで色々と。主に賞金稼ぎです。」

「そう。こういう仕事は?」

「した事はありません。」

「魔術に興味があるの?」

「いえ、特に…」

「家事は出来る?」

「…?…はあ、一通りは…。自分が生活出来る程度には出来ますが…」

「…」

「そりゃ。男は嫌い?」

「…?…特には…」

「他国には行つてみたいと思つ?」

「…?…まあ、多少は…」

「面倒見はいい?」

「…」

「……面倒見た事ないのでなんとも……」

「そう。素直なのね。」

「……ですか？」

ニールは何やら頷くと、にっこりとファイフイに微笑んだ。
「では試用期間を設けましょう。3週間頑張ってみて。」

そう言つてニールは席を立つ。すると、ファイフイが慌てて呼びかけ
てきた。

「え！？ちょっと…今まで終わり？」

「あら、終わり。充分よ？」

「いやいやいや、仕事内容は？」

「ああ…本人に聞いて頂戴。」

「ん…？」

ファイフイはまじまじとニールを見た。

「貴方の助手じゃないんですか…？」

「あら…私の助手じゃないわよ？私にはもういるもの。助手が必要
なのはもう一人の方なの。あ、これ書類ね。持つて行つて。」

「もう一人…？」

そうそう、とニールはファイフイに頷く。

「あ、あと男名ね。ファニアースと名乗つてもいいわ。好きな様に使
つて。ただし王家の方々には女名でね。」

「もう一人つて？」

ファイフイは今にも去りそうなニールに懸命に言葉を投げる。対して
ニールはにっこりと笑つて言つた。

「部屋の外にいる兵士が案内するから、ついて行きなさい。じゃあ
ね。」

そう言つてニールが手を振つて部屋を出ると、入れ替わりに兵士が
入ってきた。

「『』案内致します、ファニアース様！」

「……」

置いて行かれたフイフイは、仕方なしに少々疲れた思考を切り替えた。

(もう男の設定でいいんだな?)

取りあえず面接は通ったようだ。

今からその大魔術師の元へ案内してくれるようだし、それなら言われた通り、本人に色々訊くのが得策だろう。

そう考えて、フイフイは兵士に向き直つて頷いた。

「頼む。」

取りあえずは、ついていく他ないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876y/>

失われた国　—夢に囚われしもの—

2011年10月31日15時10分発行